

平曲の譜記とアクセント

— 〈下ゲ〉にあらわれる譜記の検討 —

上野和昭

平曲譜本は、主として金田一春彦、奥村三雄両博士の研究によつて、アクセント史上の貴重な資料として位置づけられてきた。⁽¹⁾

とくに非音楽的な〈白声〉や音楽性に乏しい〈口説〉のような曲節は、譜記が簡單で、その利用も容易である。しかし、その他の音楽的曲節については、必ずしも十分に検討されてきたとはいえず、具体的な用例に施された複雑な譜記とアクセントとの關係を理解することは、なお難しいように思われる。それは、音楽的曲節では、多様な譜が連続してあらわれるからにはかならない。多くの場合、それらは互いに関わり合いながら、ある定まった配列をする。しかも、曲節ごとに、あらわれる譜とその配列とがおよそ定まっておき、その譜記によつて旋律が示され、さらにその旋律がアクセントを反映する。したがつて、このような観点から、曲節別に、また譜の連続した、あるまとまった単位ごとに検討されるならば、より一層平曲の譜記の利用も容易になり、その価値

も高まるであらう。

さて本稿では、音楽的曲節のなかから〈下ゲ〉を取り上げる。

〈下ゲ〉は、そのほとんどが〈口説〉に從属しているので、音楽的な譜記とアクセントとの關係を知るうえに適當であらうと思われたからである。また本稿では、本文を尾崎家本『平家正節』に拠るが、尾崎家本にみられる〈下ゲ〉の類は、〈下ゲ〉⁽²⁾、〈強下ゲ〉⁽³⁾、〈半下ゲ〉⁽⁴⁾、〈長下ゲ〉⁽⁵⁾、〈半強下ゲ〉⁽⁶⁾、〈強半下ゲ〉⁽⁷⁾、〈長強下ゲ〉⁽⁸⁾の六種であり、全部で八七〇例を数える。これらのうち、ここで考察の対象とするのは、〈口説〉に続く〈下ゲ〉のなかの〈下ゲ〉と〈強下ゲ〉とであつて、その合計数七一八は〈下ゲ〉全体の約八三％に当る。

考察をすすめるに際し、〈下ゲ〉と〈強下ゲ〉とは別々に扱う。

そして、自立語に付された譜記とアクセントとの關係を考察する。但し、助詞のアクセントも一部参考にするところがある。また複合動詞は、一応各構成要素に分解して処理する。

譜記に反映したアクセントと近世京都アクセントとを比較検討

するうえで、各語例を次の四つに分類する。「い」譜記に反映したアクセントと近世京都アクセントとが合致するもの、「ろ」合致しないもの、「は」譜記にアクセントが反映していないもの、「に」近世京都アクセントが不明のもの。このうち「い」に分類する場合は、便宜次のいづれかに該当するものとする。

① いわゆる「金田一語彙」にある名詞、動詞、形容詞のアクセントと合致するもの。ただし活用形については、奥村博士の「動詞のアクセント活用表」(㉔)(㉕)(㉖)および「形容詞アクセント活用表」(㉗)(㉘)に拠る。(これらについては語例の右肩に*を付す)また名詞の場合二類以上の間で類別に問題を残すものは、そのいづれかと一致すればよいこととする(この場合は*を括弧でかこむ)。

② 『日本国語大辞典』(小学館)の「ア史」の項に「江戸」としてアクセントが記されており、それと合致するもの。

③ 『平家正節語彙索引』(17)所載の語で、主として「へ口説」「へ白声」の譜記があがっており、そこに反映したアクセントと合致するもの。

④ 『平家正節』の、主として「へ口説」「へ白声」で、同語形に付せられた譜記に反映したアクセントと合致するもの。

また「は」は、その語に対してアクセントを積極的に反映する譜記が付されていないもの、または平曲の音楽的都合によってアクセントが旋律のなかに埋もれてしまったものを分類する。

これら「い」「に」に属する語は、譜記別にそれぞれの延語数を示す。また該当する語がない場合は、その項は除くことにす

る。

本稿では、紙幅の都合で、すべての譜形を掲げることにはできず、主なものについて検討するにとどまる。また原則として三拍語までに付された譜記を中心に扱い、四拍以上の語は、必要に応じて取り上げることとする。

二

《強下ゲ》は、『平家正節』全巻に三三五例あり、そのうちの三三四例が「へ口説」に続く。ここで検討対象としたのは、巻一上から八下までの一六八例であって、全体の約半数に当る。

《強下ゲ》には、次のような譜がみられる。⁽²⁰⁾

上、コ(「上」、ア、カケ、ツ(突)、中、へ、シ(沈)、
ハ(張)、ウ、く、ろ

一般に《強下ゲ》は、「へ口説」の内容が比較的勇壮な場合に、その従属曲節としてあらわれるもので、はじめは「へ口説」に似て、(上)(コ)、時折(ア)がでる。また(上)から(カケ)で下り、(ツ)があらわれることもある。その後(中)が、多くの場合何度か繰り返され、最後は(く)でおさまる。

このような《強下ゲ》のなかで、これらの譜がどのような配列で連なり、そしてその譜がどのような語に付せられているであろうか。またどのようなアクセントを反映していると考え、べきか。次に譜記を類型別に整理し、その主なものについて語例を掲げて考察する。

A (上)「い」 40 「ろ」 2 「に」 5

A₁ (上) [い] 毛^{*}、身^{*}、射る^⑧、為^⑩／〔に〕使^し
 A₂ (上上) [い] 国^{*}、誰^{*}、菱^{*}、有り^⑧、言^ふ、聞^く……
 A₃ (×上) [い] 請^ふ、指^す、無^し、持^つ……
 A₄ (上上上) [い] 氷^{*}、船^触、節^会、味^方、鎖^{*}……／〔ろ〕
 御墓所 (上上×) 123 C 3 口／〔に〕昆陽野、追難
 A₅ (上××) [い] 仰^す……
 A は「口説」へ白声にもでてくる譜記で、A₁●、A₂●●、A₃●
 ○●……などと考えてよい。現行平曲でも(上)はaに、(×)はeに語られる。

B (上コ) [い] 1

B₁ (上コ×) [い] 斯様^{かさま}

C (上コア) [い] 12

C₁ (コア) [い] 彼の、橋、弓^{*}

C₂ (上コア) [い] 及^ぶ、^⑧

C₃ (コア×) [い] 高^し、^⑧

C₄ (×コア) [い] 教^慮、^⑧、^⑩

(コ)も「口説」にみえるもので●とみてよく、(ア)は○とみると語例に合う。C₁●●、C₂●●●、C₃●●●●、C₄●●●●と解釈できる。

D (上カケ) [い] 72 [ろ] 2 [に] 7

D₁ (上カケ) [い] 上^馬、音^方、事^有、打^つ……
 「に」佐美(人)、七

D₂ (上上カケ) [い] 厥^{かた}、面^{かた}、敵^{かた}、昨日^{きのう}、宣^ま、落^す、下^{くだ}す
 ⑩……

D₃ (上カケ×) [い] 掌^{てのひら}、心^{*}、胡王(上××) 99 D 5 口、館^{かた}
 遺恨、思^ふ、私^づ……／〔に〕雌雄
 D₄ (×上カケ) [い] 甲、一^つ、高^し、強^し、参^る……
 右の語例からしてD₁●●、D₂●●●、D₃●●●●、D₄●●●●とみることが出来る。館山漸之進『平家音楽史』には
 カケは、平家吟譜は、節の形態を、とせしに、萩野の創設にして之れを掛け落と称す。

とあり、『平曲五線譜』では(上)がaであるのに対して(カケ)はa eとなり、「四度下行する音型をもつ」と説明される。アクセントの反映という観点から考えるならば、(上)の拍から、(カケ)の拍に移る際の音変化に着目すべきであろうから、(上カケ)がa a eという旋律であるのは、(上)のaが(カケ)にまで影響を与えてきたものではないかと疑われる。

E (上カケツ) [い] 29 [に] 5

E₁ (上カケツ) [い] 大^て手、二十(上××) 913 B 1 白、背^く、^⑩、^⑩、^⑩

高^し、給^ふ、申^す、分^{かつ}……

E₂ (上上カケツ) [い] 生^い食、同^じ、些^{ども}、物^の具、催^す

⑩ (上上××) 1282 B 3 白／〔に〕一毛

E₃ (上カケ×ツ) [い] 疾^う／〔に〕吉^例、七^反、盃^盤

山川

E₄ (×上カケツ) [い] 精^神

E₁●●●●、E₂●●●●●、E₃●●●●●●、E₄●●●●●●●と解釈できる。現行平曲では、(上カケツ)はa a e e eとなる。

F (中) [い] 92 [ろ] 26 [に] 6

F₁ (中) [い] 日、矢、代、緒、似る、居る……

F₂ (中中) [い] 首、是、先、西、上ぐ、追ふ、知る……

F₃ (×中) [い] 常、中、針、我、起く、食ふ……

F₄ (中中中) [い] 車、廿日、額、二日、鎖、留む、破る……

F₅ (××中) [に] 十騎、宝祚

(中) は、(上) と接して用いられる(指声) (折声) の場合などでは○とみられるが、(強下格) においては●とみる方がよく、F₁ ●、F₂ ●●、F₃ ●●●、F₄ ●●●●、F₅ ●●●●と解釈する。館山氏は「其の用頗る広し」とか「頗る至難の音韻なり」と説明するが、(強下格) では現行平曲でも無譜のHに対して(中) はcで語られている。

ところで、この類は「ろ」が二六例もあって問題だが、このうち二五例までがF₂ (中中) に属す。その語例の一部は右に掲げたが、すべてが二拍ないし二、三拍二類動詞の用例である点注意を要する。

G (中) [い] 22 [ろ] 8 [に] 23

G₁ (中) [い] 足、馬、鞍、事、為、柄、次、時……

G₂ (中中) [い] 間、力、男、進む、流す、始む……

見ゆ、守、同士

／「ろ」花族 (××上) 125 D 1口、憎む、惑ふ、参

る、其後、其夜、巡り

G₃ (中×) [い] 情、杖、集む、歩む、動く、返す

G₄ (×中) [い] 甲、手塚(人) (×上×) 120 D 2口、兵衛、二手、思す、参る……

G₅ (中) [い] ●と解すのが妥当であろう。したがってG₃ ●●●●、G₄ ●●●●となる。現行平曲ではc c A Hと語られるが、Dと同様、こども(中) に当る拍と() に当る拍との間で、音の下降があって欲しいところである。

H (中) [い] 16 [ろ] 1 [に] 1

H₁ (中) [い] 前後 (×上×) 386 D 2口、豊か、織か、罷る、易し……

H₂ (中×) [い] 能登殿 (×上××) 1019 A 5口、判官、文寛 (×上××) 117 D 4口、漸々、折節

館山氏は() を次のように説明する。抑エの節は、沈ミの節と異なり、其の局所を押エ下ぐるのみにあらず、次に節なきかきり、抑エ下ぐるを法とす。

これによれば() は低い音とみるのがよく、語例からして() 中() は○○○、() 中() ×は○○○と解すことができる。

I (ウ中) [い] 8 [ろ] 5 [に] 2

I₁ (ウウ中) [い] 鎌倉(上上上×) 995 A 5白、惟義(人) (上上××) 371 D 4口、讒言(上上××) 867 C 4口、散々、留まる……

／「ろ」失ふ、七日(上上上×) 830 B 5口、

十月(上上上コ) 379 C 4口、光盛(人)(上上上×) 422 B

2白 / 「に」銀箔、如意山

I₂ (ウウウウ中～) 「に」薄化粧

I₃ (ウウウウ中～) 「に」還城案

I₄ (ウウウウ中中～) 「い」都還(上上上上上コ×) 237 C 3口

I₅ (ウウウウ中～×) 「い」覚束なし④

I₆ (ウウウウウ中～×) 「ろ」高倉の宮(上上上上上コ×××) 1262 D

2口

(ウ中～) は、既述の譜記に較べてやや難しい。館山氏は、荻野校は、上の音の節を細かにして、張の節と、浮の節と兩個を設け……

浮の節は、上の音の一種なること、張の節の項に述べるが如し。而て張の節と異なり其の局所のみを浮かし上ぐるものにして、必ずしも浮きの下下に、抑エ沈ミ節あるにあらざなり。

と説明する。(ウ)が「上の音の一種」であることはよいが、このように(ウ中～)となった場合、どのようなアクセントを反映するのであるか。一応右に整理したものは、これを●○○と解した。しかし現行平曲ではe c c A Hと語るので、これを●○○と解すこともできそうである。そうすれば、I₁ 「ろ」の「光盛」やI₆の「高倉の宮」は、当時のアクセントと合致することになる。「光盛」は、秋永一枝氏の「名」のアクセントの研究を参考にすれば、「みつ」は●○○、「もり」は●●または●○○と考えられ、前部低起式であるから、氏のいわゆる(c)型になり、○○○○●

V ●●○○の変化を遂げてゐるはずであつて、(ウウ中～)が●○○であることを支持する。ちなみにI₁ 「い」の「惟義」の方は、「これ」●●●、「よし」●○であつて、秋永氏が「(C)●●●●？」とされたものである。もしそうであれば、平曲でもそれを反映した譜記があらわれて欲しいところだが、実際は(ウウ中～)(上上上コ×)などであうまいかない。

ここでは、積極的に(ウ中～)を●○○と解すべき語は二語二例しかないのに対し、●○○と解した方が都合のよいものが七語八例あるので、後者の解釈を採ることにする。

J (ウ) 「い」 20 「ろ」 5 「に」 1

J₁ (ウ) 「い」 為⑧⑩

J₂ (ウウ) 「い」 末、太刀、水、言ふ④、為⑩ / 「ろ」 馬、木曾、門

J₃ (×ウ) 「い」 今、只、中、指す⑧、取る⑧

J₄ (ウウウ) 「い」 大の、下る⑧、然り⑧

J₅ (ウウ) 「い」 参る⑧

J₆ (××ウ) 「い」 誠*

(ウ) は右の諸例からして、無譜(○)に對し●とみるのが妥当である。現行平曲でも、この場合は、無譜をH、(ウ)をeで語る。

また、J₂で「ろ」にまとめた三語は、

馬の足をぞ(ウウウ中～××) 294 C 3

木曾の次郎(ウウウ中～×) 510 B 5

門の内へ(ウウウ中～×) 300 B 5、488 C 3

右の例であって、これらは「後統語との複合による平板化現象と見る」ことができる。

K (中)ウ) [い] 1

K₁ (中)×ウウウ) [い] 二十余年(コ×××××) 49 C 1 口

K は右の一例であるが、音楽的資料の特徴を示しているので、とくに取り上げた。すなわち、音楽的にみれば(ウ)の部分は高くなり、高い部分が(中)と(ウ)との二箇所を生ずることになるが、このような場合は前の方にアクセントを反映しており、後の高い部分は音楽的なものと解すべきである。このことについては、あとも触れるところがある。

L (V)ろ) [い] 76 [ろ] 5 [に] 2

L₁ (V)ろ) [い] 合ふ(●)、言ふ(●)、失す(●)、討つ(●)、押す(●)、捨つ(●)……

L₂ (V)ろ×) [い] 出づ(●)、籠る(●)、給ふ(●)、無し(●)、隔つ(●)、招く(●)……

L₃ (×)ろ) [い] 愚か、次第、呆きる(●)、申す(●)、笑ふ(●)

L_{3'} (×)ろ) [い] 三度、おはす(●)、喚く(●)

L₃ L_{3'} [ろ] 御出(上上) 380 B 5 口 / [に] 絶死

L₄ (V)ろ) [い] 射る(●)、着る(●)、為す(●)、見る(●)

L₅ (×)ろ) [い] 効、著す(●)

L_{5'} (×)ろ) [い] 陣、出づ(●)、打つ(●)、付く(●)、馳す(●)、伏す(●)、見ゆ(●)

L₆ (×)ろ) [い] 下す(●)、下る(●)、廻る(●)、向ふ(●)

L_{6'} (×)ろ) [い] 参る(●)

(V)ろ) が付せられる場合は、これまでとちがって、アクセントの型を反映してはいない。ただ(V)の付せられた拍と(ろ)の付せられた拍との間に、アクセントの下がり目があるというこゝとだけを反映している。L₁はその語例からして●○とみるべきであらうし、L₂は●○と解しうる。しかし、L₃ L_{3'}の場合、(V)の上の無譜の部分が、アクセントの●をあらわすか○をあらわすかは、この譜記からは決定されない。L₃は●●○の、L_{3'}は○●○のアクセントの下がり目だけを反映している。

このこともまた音楽的資料の特徴の一つに数えられる。この種の譜記は旋律を指示するもので、その旋律がアクセントを反映するということはすでに述べたが、旋律の関係でアクセントの下がり目しか反映しない譜記もあり、その一例がこの(V)ろ)である。

しかし、これほどはつきりと下がり目を反映していても、現行平曲では H e c c e c e A と語り、むしろ高低が逆転しているような印象を与える。譜記とアクセントとが明らかに対応していれば、旋律も本来はアクセントを反映するのであったに相違ない。ここにも音楽的変容がうかがわれる。

L₁からは、(V)ろ)のうちの(V)までで、その語の記譜が済まされているものである。これらは最終拍(一拍の語はその拍)、すなわち(V)に該当する拍が●であることを反映しているにすぎない。したがって、語例から L₄●、L₅●●、L_{5'}●●、L₆●●●、L_{6'}●●●となるが、それぞれ(V)に該当拍が●であるので「い」に含めた。

M (中～V) [い] 8

M₁ (中～V) [い] 歩む[Ⓞ]、防く[Ⓞ]、申す[Ⓞ]

M₁は●○○を反映したとみなす。語例がみな三拍二類動詞であることから●○○のような過渡的な様相を反映したともみられないが、ここではむしろ音楽的な都合で三拍目に(V～)が当てしまったとみる。(強下ゲ)では必ず最後に(V～)の指示する旋律があらわれておさまる。しかし、この譜記をアクセントに合わせて付けるには本文が適さない場合に、(中～V)のような記譜が一つの語に付いてしまうこともあったのであろう。したがって(V～)は音楽的なものであって、アクセントは(中～)の部分に反映しているのとみるべきものであろう。

最後に、その語については無譜ながら、続く助詞との関係でアクセントを反映しているものはいくつかある。

N (x) [い] 4

N₁ (x) [い] 手 (一を) (x中)

N₂ (x x) [い] さて (一こそ) (x x中) (一)、取る[Ⓞ] (一て) (x x V)

以上で、(強下ゲ)にあらわれる自立語に付された、主な記譜の検討を終える。なお、「は」に分類される記譜とその数は左のとおりである。

(x…) [は] 90 (ろ x…) [は] 60

(x…) [は] 10 (カケ…ツ) [は] 6

(…xツ) [は] 2 (カケ x…) [は] 1

三

《下ゲ》は《強下ゲ》に較べてやや複雑である。その数は『平家正節』全巻に三九九例、《口説》に続くものはこのうちの三八四例である。ここで対象としたのは、さらにそのうちの巻一上から八下までにある一八五例であるが、実際には現行平曲の旋律を確認できた一一七例に絞って検討する。これは全体の約三分の一に当る。

《下ゲ》には、次のような譜がみられる。⁽²⁰⁾

上、コ、ア、カケ、ウ、カ(片入)、フ、シ、ハ、ハ、V、ろ

《下ゲ》は、ふつう《口説》の内容が優美あるいは比較的穏やかな場合、その従属曲節としてあらわれるもので、現行平曲では基音eの前段と基音Hの後段に分けることができる。前段のはじめは《強下ゲ》と同様であるが、その後(ウカウ)のような譜記があらわれて一旦eにおさまる。つづいて後段は、(ハ)が一度ないし数度あらわれ、ついで(ウカウ)または(ウカ)のような譜記がつづく。そして最後は(Vろ)で終る。

《下ゲ》の譜記をアクセントの反映という観点から考える場合も、やはりこの前段後段の別は重要になる。それは、前段の(ウカウ)と後段の(ウカウ)または(ウカ)とでは似た譜記であるにもかかわらず、ちがったアクセントの反映のしかたをするからである。そこでその両者を区別するために、前段にあらわれる(カ)を(カ¹)、後段のそれを(カ²)と記す。(ウ)は(ウ¹)(ウ²)の区別ではばわかるのであるが、必要に応じてその相対的位置を

ことわることにする。

つぎに「強下ゲ」で行ったように、譜記別に、その付せられた語のアクセントを考察する。ただ「下ゲ」の場合は、その譜記を比較的長めに捉えた方が考察に有効であるので、「強下ゲ」とは、そのまゝとめ方にちがいがみられる点了解されたい。また「強下ゲ」と同譜記で、現行平曲の旋律も同様の場合には語例を省略する。

a (上) 「い」 13 「ろ」 1

b (上コ) 「い」 5

c (上コア) 「い」 4 「に」 1

d (上カケ) 「い」 16 「ろ」 1 「に」 3

e (ウカウ) 「い」 93 「ろ」 15 「に」 11

e1 (ウカ¹) 「い」 有り④、出⑤、打⑥、付⑦、取⑧、取⑨、無し⑩……

e2 (カウ) 「い」 様、入る⑧、乗る⑨

e3 (ウ) 「い」 歌、岸、事、為、後、人、程、者(物)、揚、ぐ⑩、合⑪……

e4 (カ・) 「い」 鞭、言⑩

e5 (ウウカ) 「ろ」 不審(上上) 78 D 4 口

e6 (カウ) 「い」 七夜、局、勤、叩く⑩、挿頭⑪

e7 (ウ) 「い」 心、涙、覚ゆ⑩、帰る⑪、叩く⑫、給ふ⑬

e8 (シウ) 「い」 憂目、微か、歩⑩、坐す⑪

e9 (カウ) 「い」 申す⑩

e10 (カ・シ) 「い」 申す④⑩、拜む⑪

eには、前段にあらわれる(ウカウ)をもとに、この一部ないしそれに(シ)(ア)などが付加されたものをまとめてある。上の語例からして(ウカウ)は○○●●と解釈するのが妥当であり、e1は○○●●、e2は●●●●、e3は●●●●、e4は●●●●、e5は○○●●となるはずであるが、「不審」はこれに合わない。e6 e9 e10は、これらに(シ)(ア)がついたものであるが、付加された譜はアクセントの低(○)に当るとみるのが自然である。現行平曲で(ウカウ)は#f#h f e c という旋律で語られており、必ずしもアクセントと対応する旋律とはいえないようである。

f (ハ) 「い」 102 「ろ」 8 「に」 13

f1 (ハ) 「い」 見る⑩、木

f2 (ハ) 「い」 是、其の、躰(上上) 123 D 4 折、御簾(上上) 230 D 2 白、由、置く⑩、行く⑩、事、人、

「に」 明、旧

f3 (ハ) 「い」 歌、内、朝、後世、事、後、添ふ⑩

f4 (ハ) 「い」 今、雁、父、中、松、寛む⑩、読む⑩……

f5 (ハ) 「い」 傷む⑩、給ふ⑩、弥生

f6 (ハ) 「い」 翼、覚ゆ⑩、曇る⑩、光、行方

f7 (ハ) 「い」 未だ(コ) 91 C 2 口、御辺(上) 133 A 1 白、後生、姿、涙、平家、給ふ④、流す⑩、申す⑩

f8 (ハ) 「い」 大き、心、主上、月日、朝家、童、合す⑩、思ふ⑩、陳す⑩(上) 748 B 3 口、

「に」 普天、

- f₉ (ハ、ハ×) [い] 御前 / 「ろ」 四海 (××上) 78 D 1 口
- f₁₀ (ハ、ハ) [い] 一首
- f₁₁ (ハ、ハ) [い] さて、最後、終に、武蔵 (××上×) 585 C

4 白

(ハ) は次の譜が出るまで続くのが原則であり、語例からしてこれは●とみてよく、(ハ) は○とみることができ。しかし f₇ (ハ、ハ) や f₈ (×、ハ) となると面倒である。語例から考えれば、これらとともに●○○を反映するものとみられる。すなわち第三拍の (ハ) は音楽的なものと解することになる。現行平曲では、f₇ は c e H c f₈ は e H c という旋律で語り、第一の高まりの方が際立ち、次の下降がはっきりとしている。

- g (ウカウ / ウカ) [い] 44 「ろ」 11 「に」 6
 - g₁ (ウカ) [い] 斯、舞ふ、行く、国、足る
 - g₂ (ハウ) [い] 知る
 - g₃ (ウカウ) [い] 申す
 - g₄ (ウカ) [い] 如何、出す、納む、申す / 「ろ」
 - ざっと (上上×) 199 D 2 白、言葉、袂、語る、申す
 - g₅ (ウカウ) [い] 仰せ、言葉、然様、重ぬ、削る、過す、流す、申す / 「に」 王地
 - g₆ (ハ、ウカ) [い] 大臣、然こそ、少し、参る
 - g₇ (ハ、カ) [い] 心、覚ゆ、口説く
- 以上は、後段にあらわれる (ウカウ) (ウカ) をもとに、その一部ないしそれに (ハ) (ハ) が付加されたものである。g₁ の

(ハウ) の (ウ) は (カ) の前にあらわれるもので、この類に含めておく。後段では前段とちがいが、(ウカウ) (ウカ) とともに●○○を反映するとみるのが穏当である。すなわち g₁ は●○、g₃ g₄ は●○○、g₅ は●●●となり、(ハ) や (ハ) の付いた g₆ g₇ は、それぞれ●●●、●●●と解釈できる。

- h (ウ) [い] 4 「ろ」 2 「に」 1
 - h₁ (ウ) [い] 来
 - h₂ (×ウ) [い] 今、何
 - h₃ (××ウ) [い] 今際 / 「ろ」 桜、七日 / 「に」 鳴戸
- 《下ゲ》の (ウ) には五種ある。その一は (カ) の前にあるもの、その二は (カ) の後に、(一) の前にあるもの、その三は (カ) の前にあるもの、その四は (カ) の後にあるもの、その五はその他の (ウ) で、それぞれを (ウ₁) (ウ₂) (ウ₃) (ウ₄) (ウ₅) とするならば、h₁ は (ウ₂) であって●とみてよく、h₂ h₃ は (ウ₁) であるから○とみなすことができる。したがって、「今」「何」「今際」の三語は、次の助詞の部分 (カ) で高くなる遅上り型とみなして「い」に含めた。

- i (ウア) [い] 15
- i₁ (ウア) [い] 沖、斯、沙汰、時、花、皆、合ふ、言ふ
- i₂ (ウア×) [い] 哀、思ふ、給ふ、申す
- i₃ とも (ウ) は前段の (カ) の後にでる (ウ₂) であるが、「合ふ」「言ふ」「思ふ」「弾く」に付せられたものだけは (ウ₅) であって、後段で一旦 (ウカウ) (ウカ) などがあらわれたあと

にてでくる。この(ウ)も●○とみると語例に合う。

j (・ウ) [い] 8

ji (・ウ) [い] 琴、僧、其処、差す、指す、付く、無し

ja (×××××・ウ) [い] 物騒し(上)上上上×××(●)80 D

1白

jの場合、(ウ)はみな(ウ)の例であるから、(・ウ)は○とみてよく、語例もこれを支持する。jaは無譜の部分が●となり、最終拍の(ウ)は音楽的な旋律を示すにすぎないものとみる。

k (シ) [い] 12 [ろ] 11

k1 (×シ) [い] 際、鞍、殿、夢、言ふ、乗る / [ろ]

有り、寄す

k2 (××シ) [い] 後る、誇る、渡る / [ろ] 諸卿、給ふ、唱ふ、参る、弱る

k3 (シ××) [ろ] 御室(××上) 25 B 4口

k4 (×××シ) [い] 上藤(上)上ココ× 140 D 4口、宰相(上)

上ココ 841 D 2口、悲しむ / [ろ] 助かる

k5 (シ×××) [ろ] 御前(××上上) 872 C 1口

(シ)と無譜とからなる譜記が付けられている語の場合は、これだけの資料からでは、納得のいく解釈をえられなかった。一応無譜を●、(シ)を○とみなして整理すると、右のようになる。

k1 ●、k2 ●●、k3 ●●●、k4 ●●●●などを反映したものか。

このほかに、(シ)を、他の譜記と関わりなく、その付せられ

た拍のみを低く語るように指示するものとみることができれば、また別の結果が出てくるが、なお検討を要する。

l (・) [い] 18 [ろ] 1 [た] 2

li (・) [い] 見る、手(一)

lj (×・) [い] 彼の、御座、事、頃、時、先、皆、推す

(上)× 55 A 2白、呼ぶ

lk (××・) [い] 宿所、行方、進む、結ぶ / [ろ] 一人

この譜記は後段のはじめにあらわれるもので、無譜に対して(・)は○とみてよい。現行平曲では無譜をe、(・)をHで語る。

m (√ろ) [い] 55 [ろ] 5 [た] 3

m1 (√ろ) [い] 事、夢、業、言ふ / [ろ] 馳す / [た]

相応

m2 (√ろ×) [い] 哀、祈る、仰す、給ふ、流す、無し、放つ、申す

m3 (×√ろ) [い] 愚か、便り、所、出す、続く / [ろ]

申す、参る

m4 (×√ろ) [い] 坐す

m5 (√) [い] 為

m6 (×√) [い] 落つ、擡く、泣く、遣る

m6' (×√) [い] 出づ、落つ、書く、攻む、賜ぶ、干す、見ゆ

m7 (××√) [い] 歌ふ、下す、昇る

m7' (××√) [い] 参る

(Vろ)は、(強下ゲ)における(Vろ)と全く同様であり、(Vと)ろ)の間にアクセントの下がり目があるということだけ反映している。m以下は(Vろ)のうちの(V)まででその語の記譜が済まされているもので、これらは最終拍(一拍の語はその拍)、すなわち(V)に該当する拍が●であることを反映しているにすぎない。

また、(Vろ)を現行平曲ではH) c e c e c e Aと語るが、(Vろ)の場合同様、これもアクセントに相応しい旋律とはいえない。

以上で、(下ゲ)にあらわれる自立語に付された、主な記譜の検討を終える。なお、「は」に分類される記譜とその数は左のとおりである。

- (x...) [は] 95 (ろx...) [は] 30
- (ア...) [は] 14 (フx...) [は] 15
- (カケ...) [は] 6 (カ、) [は] 4

四

平曲の(下ゲ)という曲節において、そこにあらわれる自立語に付された記譜が、どのようなアクセントを反映するとみられるか、また語のアクセントと一致するかどうかについて検討してきた。このようにして音楽的曲節を調べることによって、いくつかの音楽的資料の特徴を指摘することができる。

その一は、アクセントを積極的に反映しない記譜や、平曲の旋律にアクセントが埋没してしまっているような記譜があることで

ある。その二は、(Vろ) (Vろ)のようにアクセントの下がり目しか反映しない記譜があることである。その三は、高く唱えられたと思われる部分が二箇所のみみられる場合、はじめの方にアクセントが反映しており、後の方は音楽的なものであること、またその四は、同じ記譜でも、そのあらわれる場所や他の譜との前後関係によって解釈を変えなければならない場合があることである。これらは、平曲の記譜が音楽的旋律を指示するものであり、さらにその旋律がアクセントを反映するという、音楽的資料ならではの事情によるものと思われる。

しかし、このような音楽的資料としての制約の範囲内においても、記譜とアクセントとの関係には極めて密接なものがあることは、すでに見てきたとおりである。試みに、一括して(一)、三で検討した以外のものも含めて)アクセントの反映度を算出すれば表1のようになる。(「い」)「は」の数字は延語数。表2も同様)

表1

(下ゲ)	(強下ゲ)		
401	617	[い][ろ]	[は]
44	58	[は]	[に]
164	169		計
41	61		I
650	905	[い][ほ]	II
61.7%	68.2%	[は][に]	III
65.8%	73.1%	[い]	[は]
90.1%	91.4%	[は][に]	

これによれば、「は」の処理によってやや結果は違ってくるが、それにしてもIIではいずれも70%前後の反映度を示し、さらにIII

では実に90%を超える。これには、本稿における合致、不合致の認定に問題があるとみるむきもあろう。しかし、*を付した語についてみても、表2に示すように、なお〈下ゲ〉のアクセント資料としての価値は高いものであるといえる。

表2

〈下ゲ〉		〈強下ゲ〉		[い]	[ろ]	[は]	[に]	計 [は]	I II	III
*の 名詞	*	*の 名詞	*							
62	204	88	337							
7	16	1	31							
15	78	17	91							
—	—	—	—							
84	298	106	459							
73.8%	68.5%	83.0%	73.4%	[い]	[は]					
89.9%	92.7%	98.9%	91.6%	[い]	[は]					

もちろん、この試算は一つの目安であって、アクセントの型を反映する譜記も、下がり目を反映する譜記もまとめて扱ったわけであるから、それなりに考えなければならぬ。しかし、この〈下ゲ〉のような音楽的資料であっても、本稿で述べた諸操作を経た後であるならば、謡曲譜本、近松浄瑠璃譜本、また平曲の〈口説〉〈白声〉などと同様、十分にアクセント資料としての価値を持つものであることが指摘できたと思う。

そして、このような研究は、譜本間に異同がある場合や一本に

二様の譜記がなされているような場合に、一つの評価基準となりうる。また、本稿でも処々に触れるところがあったが、現行平曲の旋律について、その変容の有無ならびに溯源の方向を示唆しようものと思う。

注(1) 金田一春彦「平曲の音声」(『音声学会々報』101、昭和34—12)、「国語アクセントの時代的変遷」(『国語と国文学』37—10、昭和35—10)、「国語アクセントの史的研究

原理と方法」(昭和49—3、塙書房)など

(2) 奥村三雄「平曲譜本の研究」(昭和56—5、桜楓社)など
平家正節刊行会編『平家正節』(昭和49—1、大学堂書

店)

(3) ほかに〈中下ゲ〉が一例あるが、ここでは除いた。金田一春彦「平家正節平曲の大旋律型の種類」(『吉川英史先生日本文学』121頁)に見え、昭和48—3)121頁に東大本についての考察がある。

(4) このほか、本行の左側に別記された〈下ゲ〉が五例ある。

(5) 『国語アクセントの史的研究』62頁以下。

(6) 『平曲譜本の研究』360、361、406頁。

(7) 奥村三雄編(昭和58—2、大学堂書店)

(8) 現行平曲については、『平曲五線譜』(東京芸術大学蔵)や、金田一春彦博士の伝えられる館山甲午氏の平曲を参考に記す。また旋律はC G A H c l g a h で便宜的にあらわす。

(9) 『平家音楽史』(明治43—10) 908頁。

(10) 鷹田治子「平曲の素語と位語」(『金田一春彦博士古稀記念論文集』第三卷 昭和59—7、三省堂) 24頁。

- (11) 『平家音楽史』 864頁。
 (12) 『平家音楽史』 868頁。
 (13) 『平家音楽史』 871-878頁。
 (14) 秋永一技「古今集声点本における「名」のアクセント」『国文学研究』 67、昭和54—3、『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』(昭和55—2、校倉書房) 所収。
 (15) 『平曲譜本の研究』 400頁。
 (16) 第三類として扱う。『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』 377頁。
 (17) 『平家音楽史』 871頁。
 (18) 『平曲譜本の研究』 441頁。
 (19) たとえば「いつしか」(310 B 5下ケ) という語に二様の譜記が付されており、右譜には(ウカウー)、左譜には

新刊紹介

鈴木 豊編

『古語拾遺 声点付語彙索引』
 乾元本日本書紀所引 日本紀私記

声点付語彙索引
 (アクセント史資料索引四)

『古語拾遺』『日本紀私記』とも語彙・語法をはじめ、さまざまな分野で研究されてきたが、声点資料としての研究は、いまだ充分ではなく、特に『古語拾遺』については、編者による研究が大いに期待されるところである。この合冊された二種の声点

(シウㄒ)とある。この語は(×上××) 161 B 4口などという譜記も付されているので●○○○というアクセントだったと思われる。してみると右譜よりも左譜の方がこの場合は妥当なのではないかと考えられる。
 (20) 印刷の都合で「突」「沈」「張」「片入」の譜を、それぞれかりに(ツ)(シ)(ハ)(カ)とした。

本稿は、昭和六十一年一月十一日、早稲田大学国語学会研究会で口頭発表した原稿に加筆したものである。平曲については、金田一春彦博士の御指導を仰いだ。ここに記して厚く御礼申し上げる。なお、本稿は昭和六十年年度文部省科学研究費助成による研究の一部であることを申し添える。

索引の刊行により、中古アクセントの解明がますます進められるであろうし、また近代アクセント解明の橋渡しとなるものと思

『古語拾遺』声点付語彙索引は、声点注記のある「嘉祿本」・「暦仁本」・「伊勢本」における声点付語彙すべてを示したものである。可能な限り原本との照合を行ったうえで、作成であり、なかなか原本に当れない付近では非常にありがたい索引である。アクセント史の上で重要な資料となるばかりでなく、古語の語源解明にも益するものである。

乾元本日本書紀に引用された『日本紀私記』についての声点付語彙索引は、編者が万葉仮名表記の和訓の仮名遣いを非常に正確であると認め、声点の注記されている語のみならず、すべての和訓を掲載しており、仮名遣い資料としても活用でき有益である。(昭61・2 私家版 A5判 一—五頁 二〇〇〇円) [坂本清恵]

なお、私家版のため、ご利用の方は左記にご連絡いただきたい。

〒160 新宿区戸山一—二四一—

早稲田大学文学部秋永研究室内

アクセント史資料の会